アイヌ語地名漫歩

末　武　敏　夫

れいれいしい標題を掲げたが，私は金田一博士や，故知里教授あるいは熱心な郷土史家の方々のむこうを張って，一大論説を掲げるものではない。魚と卵第100号に，〝カパチエプ〟のアイヌ語名について掲載されたとき，編集子は「末武はアイヌではないか」と酷評されたことがあり，この機会に「私は和人である」ことをはっきりしておきたい。

私がなぜ，ここに，こうしたものを書く気になったかと云えば，すでにご存知のとおり，100年前に，開拓使の達しで，アイヌ語地名は，なるべくそのまま残すようにと示された。そこで和人は必要にせまられた部分，例えば，市町村や字名，あるいは身近かな山や川などに適当な漢字を当てはめた。しかし，不便なところは，かな書きで残されている。

この書き換えのときに，アイヌ語には文字がないので，アイヌから聞いた発言で伝えられ，また一部には，内地人の方言も入って，いろいろは表現される結果となった。このことは，郷土史研究家の間の語源論争のもととともなっている。

アイヌ語地名の大部分は形容詞が多く，調べてみると，大変おもしろい。私も機会を得ては，しらべたりして，身近かな人達に得々と一方的に解釈で論説（？）したりして，有難迷惑と思われた方も多いと思います。

はじめにお断りしたとおり，文法的にまとめたものでなく，気らくに目を通していただく積りでお話しを進めたいと思います。そして私の任地が根室地方と，千歳の一部でしかありませんので，片寄ったものとなりますのであらかじめご承知願います。

アイヌは濁音をあまり使わず，半濁音が多いことと，ツとテの中間音で，いきを飲みこむような音「**ㇷ゚**」があることが特色です。

アイヌ語で共通して最も多く使われるものについて2，3あげてみよう。一番多いのが川の名前で**ベツ**。これは一般的に用いられる川であり，水が流れても，いなくても幾分小さい沢の意味の**ナイ**がある。だからチョロチョロ流れているのは，ベツではなくて，ナイで表現されている。（樺太では逆の意味で使用された。）地名につけられた漢字は，ベツは別，ナイは内が代表的である。実際には，○○別川というのは，これを訳せば○○川川

ということになり，まことにおかしいことになる。

アイヌが一番先に住みついたのが海岸であり，川を伝ってだんだん山奥へ入り込んで行った。従って，川の水は高い処から流れ出てくるが，海をもとにした見方をした。即ち，海に流れ込んでくる本流は親川…**シ**ペツであり，上の方に行くに従って枝川があり，これには夫々，小供の川…**モ**ペツ，比較的大きな川…**オンネ**ペツ，小さい川…**ポン**ペツがあり，そのほかにも祖先（古い）の川，新らしい川などがある。また川の状態によって，曲りくねって丁度，腸のような川…**カムカム**ペツ（カンカン川，カモカモ川），折角山の奥へ入ったのに海の方へ逆もどりするような川…**ホルカ**ペツなどで，川の合流点が**プト**である。

川の上流に湖**トー**があり，これは沼の意味もある。更にはかん水湖も同じ。たまたま湧水源があれば**ユー**（温泉の意味もあり，熱いものは**セセク**，薬浴する場合は**クスリ**）。川の中に水が湧き出している処は**メム**で面川などがそれである。ふ化場に一番関係の深い，魚の産卵場が**イチャン**で，標津川上流のキムンイチャン（山奥の産卵場），伊茶仁，深川市一已村，恵庭町漁（イザリ）などがある。

北海道の川で大きな川の名前は，たいてい**シ**が入っており，以上のことから親川の意味がお分りと思う。我々が「母なる川」という意味にも通じて面白い。

ところが，この「シ」についてなかなか分らなかったことがある。西別川の水源，虹別事業場が創業当時の捕獲場は「シワンプト」と云われていた。国鉄バスで西春別駅から虹別に向う途中に「志碗太」とあるのがそれで，西別川本流とシワン川の合流点を意味するが，この支流シワン川の上流に虹別アイヌのコタン（部落）がある。そしてこの正確なアイヌ語地名は**シアン**である。シは前掲のように親であり，アンは本誌第85号で紹介したようにサケを獲る仕掛けの意味で，昔釧路アイヌが川沿いに上流の内陸部に入り込み，更に西別川上流にも住みつくようになって，川上土人と称していた。これが現在，弟子屈町，標茶町（虹別も含めて）は，釧路国川上郡と称している。この「シ」があって「モ」がないとはおかしい。地図を拡げて探したところが，あった，あった。水系のまったく違った標津川の上流に**モアン**川があった。即ち小供の魚とり場である。これは仕掛けの大きい，小さいを表現したものか，或は獲る魚の大きい，小さいを表わしたものかは断定出来ない。けれどもモアン川にまつわるアイヌの伝説で，悲恋のアイヌメノコがヤマベになった話があり，シアンはサケの獲り場，モアンはヤマベの獲り場の意味ではなかろうか。こうした関係は，ほかにもあると思われるし，興味深いことなので，みなさんも探してみて下さい。

モペツは，子供の川で，小さいことを表わしていますが，**モン**ペツとなると全く意味が変って，静かな流れの川となります。これは北見，日高，伊達と有名な川のほかにもたくさんあります。これも漢字を当てはめるときに，**ン**を忘れたり，つけたりしなくてもよいのに付加えたりして間違うことがあります。

川の流れは清いのが当り前ですが，中には粘土質のところを流れたり，ヤチの中を流れてかなけ水のものもあります。これらは赤い川の意味で**フーレ**ペツと云い，和語で風連がこれに当ります。赤いのは全部これで表わし，赤い実の食べ物は**フーレップ**と云います。風烈布がこれです。（プは食べ物）。よく草原の中で，イチゴに似た粒の大きいのをフレップと云っていますが，赤い食べられるものは全部含んでよいことになります。

暗い川，或は黒い川が**クンネ**ベツで，荒れ川，又は悪い川が**ウエン**ベツ，ウエンナイなどがあります。

千歳支場は来年（昭和44年）創立80年を迎えるわけですが，当初「**ルエン**」の地に選定すとあり，これはル・ウエンで，その意味は「道・悪い」を表わしています。現在の第3ふ化室の山側に屋外養魚池のあるところで，5万分の地図を見ても分りますが，千歳支場から，恵庭町漁に向けて山道があり，これに「ふ化場道路」と名前がついていて，この出発点のところが「ルエン」に当る訳です。この養魚池の外側に現在コンクリートの門柱があり，この門柱のそばが笹やぶになっており，そこをよく見ると砂利が敷かれて硬い地盤になっていますが，昔は附近一帯と同様に火山灰地で，雨が降るとこの坂路に苦労したらしい。明治の中期，ふ化場の創業時代，漁川で採卵したマスの卵を運ぶ道路であり，漁からは，ふ化場附近で密漁に通ってくる山道でもあった。今はすぐ傍を紋別林道が横切り，ル・ウエンの跡片もない。

千歳支場からすぐ下流に苗別川という清流があり，現在千歳市の上水道取水設備があり，秋おそく，捕獲場を逃がれたサケや，サクラマスが堀についている。蘭越アイヌの密漁場所でもある。ナイベツは，そのまま訳せば沢川となり，和語では了解出来ても，アイヌ語では意味をなさない。先ほどの川川と同じことになる。これは**ナイプド**が本当で，川の合流点を意味しただけのもの。

ウシは多い，たくさんあることを示す。千歳市の蘭越は**ランコ**ウシで桂が多かったことを表わし，捕獲場名の西越，または根志越は**ネシコ**ウシで鬼ぐるみがたくさんあったことが分る。よく熊牛原野という地名を見て，熊や牛が多いのだろうと勝手に判断する人が居るが，とんでもない誤解で，**クマ・ウシ**で魚の干し場がたくさんあったことを意味し，必ずサケの溯る川の附近か，海岸では豊漁の場所であった。

アイヌとは，日本というのと同じように，全体を表わす意味がある。これが名前の下に付けば男を意味する。これと対象に「シャモ」と云う言葉で「日本人」を呼称したが，そうではない。これは**シシャム**又は**シサム**で隣人を意味する。早くにアイヌに接した和人が,「シシャム」と呼ばれたので，日本人の意味だと早合点したもの。しかし，英語の「ジャップ」と同じように，その言葉の印象が，卑下したものに受取られている。

虹別の構内のはずれにオソウシの滝というのがあり，滝につけられた名前と思っていましたが，**ソー**のつく地名はあんがい多い。オソウシナイ，オソーケシナイ，層雲峡など。

ソーは滝のことでオ・ソー・ウシ・ナイは川尻・滝・多い・川であり，大町桂月が，ソーウンベツを層雲峡と命名したのは有名な話。

形容詞で小さいことを「ポン」と言いますが，反対に大きいことを**ポロ**と言います。これが使はれている例は，幌茂尻ポロ・モシル～大きい島，ポロソー～大滝，ポロピナイ～大石沢，ここで間違い易いのは幌加内を音訳どおりホロカナイとする様な場合で，これは前掲のように，ホルカナイとして考えなければならないし，ポロウンナイと言う地名の場合は，**ポル**ウンナイ～洞穴・多い・沢としなければならない。アイヌ語ではラリルレロ間の転化はゆるされるし，常用されていたので，注意しなければ全く違う意味になる。

ルは道という意味のほかに融ける意味がある。一般には，鮭をこおらせたものがルイベで，刺身は美味だと言はれている。正確には**ル・イペ**で融ける食べ物であって，鮭だけのものではない。カレイでもコマイでもよい。内地人の感覚ではこおらせてルイベをつくるのですが，寒さの厳しい原始の彼等は，必然的に，自然に凍ったものを触かして喰べなければならなかったことを考えればうなづける。